

## 尾崎先生の思い出

笹川 通博

尾崎先生に初めてお目にかかったのは、私がまだ大学四年生か、大学院生だった頃である。もう、二十年程も前のことになり、記憶もだいぶ薄れてしまった。当時、私が学生として所属していた新潟大学理学部生物学科の石沢先生の研究室では、「新潟県植物分布図集」の作成が盛んに行われていた。池上先生の標本が新潟市植物資料室にあり、分布図作成のために、その標本を運ぶ作業を手伝った覚えがある。尾崎先生はその頃、新潟市の囑託として植物資料室で仕事しておられた。先生が運転するスバルの小型のボックス型自動車「ドミンゴ」に乗った覚えがある。その時頂いた名刺を、今もまだ持っている。

私の学生時代の研究テーマは、新潟県内の湖沼の植物相であった。尾崎先生の主要な研究テーマの一つが、まさに湖沼の植物であった。先生は新潟市の依頼で、鳥屋野潟の植物の調査を行っていた。私もその調査会に顔を出すようになった。市立高志高校に牧野先生がおられ、その生物室が本部ようになっていた。調査員には、関繁雄、柄沢、川端、小林、白崎、高橋、鷺尾、各先生がおられたと思う。今思えば、新潟県の植物研究を担うじねんじょ会の先生方と、ここで顔見知りになることができた。尾崎先生の「ドミンゴ」は、調査のために様々な細かい工夫がなされていた。座席がテーブルになったり、水草採集用のさおが積めるようになっていたり、車の使い方に感心させられた。また、先生はワープロやコピーを駆使して資料を作られていた。私には、それが目新しく、新鮮に感じた。

当時の鳥屋野潟は、今と比べて水草が大変豊富であった。鳥屋野潟で漁をされている方に船を出してもらい調査をするのだが、モーターのスクリューにすぐにヒルムシロの仲間が絡まってしまう、しばしば停止して鎌で水草を取り除く。船が進むと魚がぴょんぴょん跳びはねる。湖面を渡る風が涼しくて心地よい。このような船に乗るのは、私には初めての経験であった。尾崎先生はいつも菅笠をかぶり、黒い袋に包まれたニコンの一眼レフを首から提げていた。調査点で船を止め、植生を記録し、かぎのついたさおで水草を採集する。のたうつように群生する巨大なオニバスや、一面に黄色の美しい花を咲かせるアサザなど、今の鳥屋野潟を思うと夢のようである。ある暑い夏の日の調査で、女性の水死体を発見したこともあった。誤って川に落ち、鳥屋野潟まで流されたということであった。その遺族の方から調査団に、後でビール券を頂いた。

大学院生の時、私は主に福島潟の植物を調べた。私は50ccのスクーターに乗って、新潟大学から福島潟まで調査に行っていた。ある時、その姿を尾崎先生に見られ、車上

から声を掛けられたこともあった。また、私はいつもボロボロの作業服で調査に出ていた。私自身はどうせ汚れるからと、服なんてかまわないでいた。ある時、よほど見かねたらしく、尾崎先生は私に新しい作業服上下を下さった。先生の体格と、私の体格と、ほぼ同じと考えられたらしい。シャツはほぼ体に合ったが、ズボンの方は太かった。やはり腹が違うと、先生は笑われた。しかし、歩き回るので、ズボンは太い方がよかった。おそらく、その作業服は、先生に言われて、奥さんがお買いになったのではと思う。私は、それがまたボロボロになるまで着ていた。

「水草研究会」という、水草を研究する全国的な組織があることを知り、大学院生だったある年、東京で開催された大会に一人で行った。その大会には尾崎先生は出席されていなかったと思う。先生がその水草研究会の主要な会員の一人だということは、後で知った。その会で、名古屋の高校で教員をしながら水草の研究をされている浜島先生と知り合うことができた。浜島先生は尾崎先生と交流があり、また、私の高校の先輩（愛知県立刈谷高校）だということを知った。こんな人生の出会いもあるものなんだと、感激した。

私が新潟県の高校教員として就職してから、その水草研究会の大会に、何回か尾崎先生と一緒に参加した。一つは島根県の松江で開かれた大会であった。次の年に新潟で大会を開催するので、その下見ということだった。先生はくだんの愛車であちこち回りながら行き、私は列車で行き、どこかで合流したと思う。島根半島の海岸の林に、一緒に潜って植物を見た。私は蚊にたかられてほとんど閉口したが、先生はと見ると、ほとんど蚊は集まってなく、この違いは何だろうと思った。島根半島の海岸と港を見て、佐渡によく似ていると先生はおっしゃった。また、滋賀県の大津で開催された大会にもご一緒させていただいた。これも先生は車、私は列車で行き、どこかで合流した。刈屋さんとも一緒だったと思う。先生は各地の名木の所在地が記された詳細な地図を持っておられ、何か所かでハナノキというカエデを見て回った。おそらくは有名なお寺の壁画と一緒に、そのガイドさんの説明を聞きながら鑑賞した。北海道の霧多布の大会にも行った。夏なのに霧が出て寒く、尾崎先生が雨具を貸して下さった覚えがある。

その水草研究会の大会が、新潟で開催されることになった。大会委員長は新潟大学教育学部の福原先生で、県内の水草研究会の会員と福原先生の学生が運営に当たることになった。福原先生は陸水学が専門で、以前から水草の研究もされていた。大会会場は、今はなくなった「ホテルニュー越路」であった。尾崎先生は、写真の展示など、細かいところで精力的に仕事をなされた。先生の奥さんもお手伝いに来られていた。奥さんにお会いしたのは、この時が初めてであったと思う。当時、亀田町にある高校に勤めて

いた私は、懇親会およびおみやげ用に、「越の寒梅」を手に入れるように先生から言われ、学校の出入りの者をお願いして入手した。

尾崎先生と一緒に、福島潟のオニバスの保護事業に関わったこともある。福島潟では、干拓の影響でオニバスが消滅したと思われていたが、石沢先生と私の調査で、オニバスがまだ生き残っていることを確認することができた。そこで豊栄市は、オニバスの保護事業に取り組むことになった。尾崎先生の助言の元、豊栄市の職員の方が試行錯誤を繰り返し、ある程度の保護、増殖の成果が得られた。小学校にオニバス栽培用のプールを作ったり、オニバスが生えている池のアメリカザリガニを退治した。私はほとんど何もできずにいた。豊栄市はオニバスとヒシクイを市のシンボルとした。その豊栄市も、今年の春から新潟市と合併した。

当時、初任校として私が勤めていた新潟向陽高校には、もう亡くなられた荒井先生という化学の先生がおられた。荒井先生は大変精力的な方で、化学はもとより、生徒指導、学年主任でらつ腕をふるう一方、鳥屋野潟や新潟水俣病などの公害、環境問題にも関わっておられた。私はその先生の紹介で、河辺先生が主催する「環境問題懇話会」に顔を出すようになった。月に1回、夜、新潟水俣病の弁護団長、坂東先生の西堀にある事務所で、講師にあたられた方が環境問題に関する話題を発表、提供し、それについて十名位の参加者が討論するという会である。話題は多岐にわたった。そこでも尾崎先生に会ったのは、驚きであった。先生はしばしば海外旅行をされていて、その時の写真を話題として提供されたこともあった。諸橋さんもその会の常連であった。また、鳥屋野潟の環境問題に関して、尾崎先生が荒井先生を訪ねて、新潟向陽高校に来られたこともあった。

尾崎先生にお会いしたのは、先生が高校を退職されてからなので、先生が本当に精力的に活躍されていた時期のことは、残念ながら分からない。尾崎先生をご存じの何人かの先生からは、若い頃とほとんど変わらない、ということは何回か聞いた。私が持っている尾崎先生の思い出は、断片的なものにならざるを得ない。じねんじょ会にご一緒したとき、夜空の下、火の回りで、皆に促されて、やおらハーモニカを取り出して吹き始めたり、それほど大きくない声で歌ったり。じねんじょの「勉強会」で酒を飲み過ぎて気分が悪くなった私に、夜空の下で優しく声を掛けて下さったこともあった。秋山郷でのじねんじょ強化合宿の時、河岸段丘の急なつづら折りの坂道を登り、汗だくになってメグスリノキの大木を見に行ったこと。ある夏、私が担当者として佐渡でじねんじょ会を行ったとき、金剛山という山を下りたところで、先生が登山道でしばらく倒れ込んでしまったこと。鳥屋野潟の調査の資料整理で先生の自宅に何

回かおじゃましたこともあった。部屋はおしゃれに整理され、植物の資料のみならず、海外旅行での写真や、クラシック音楽のCDなどもあり、高い文化の香りを感じた。クラシックのコンサート会場で、何回か先生夫妻をお見かけしたこともある。

私も転勤を重ね、次第に尾崎先生とお会いする機会も減り、たまにお会いすると、失礼ながら、ずいぶんとお年を召したように感じた。去年の春、たまたま久しぶり電子メールを見て、尾崎先生の訃報を知り、お葬式に駆けつけた。もう少しで知らないでいるところだった。お葬式の最後に、奥さんがしっかりとした声で、みなさんは早く逝かないでください、長生きしてください、とおっしゃったのが、大変印象深く残っている。また、亡くなられた後、新津の植物資料室に運び込まれた先生の蔵書を記録させていただいた。ずいぶん古い本もあり、東京、新潟などの古本屋で求められたものも多いのだろう。戦前、戦中、戦後のもの、その紙質、細かい丁寧な字の書き込みを見るにつけ、若い頃の尾崎先生、あるいはその時代の人々の勉強ぶりを想像し、恥ずかしいばかりである。

## 尾崎先生のことども

佐藤信弥

尾崎先生との初めての出会いは確かではない。多分、柏崎は番神岬の海岸の観察会からだろうと思う。このとき私はまだ頸城牧に住んでいて牧から参加したか、自宅から参加したか確かではない。この観察会は海浜植物の観察会であった。初めて参加した私にはどの人が尾崎先生だったのかの記憶が鮮明でない。この観察会で、平田幸治先生（植物病理）から「お前は新米だから採集した植物には胴乱に入れる前に荷札に名前を書いてつけなさい」と指導されたことは私の石頭から消えていない。

尾崎先生はカエデの大家でおられた。私はコミネカエデ、ミネカエデ、ハウチワカエデ、イタヤカエデ、ウラジロイタヤ、イロハカエデ、カラコギカエデ、メグスリノキなどの生態や分類分布についてのお話をおききした。もちろん調査現場や山小屋やテントの中で蕨蓄のあるお話をおききしたが、それは飯豊山での調査を置いては外にない。赤谷コースでのことであった。この頃はまだ若くて体力も気力も私にはあった。その年の飯豊山の調査は赤谷コースと分かった時、私はひとりで予備調査をしたのである。二王子温泉に一泊して裏の岩場の急な斜面を登攀してハクサンコサクラが出てくる手前あたりまで踏査した。本番で我々はこの辺りに幕営をした。このコースは体力的にもきついと自分の予備調査で想定していた。真夏日の続く暑い日であった。一番遅くここに到着されたのが尾崎先生だっ